

たか  
高

はし  
橋

ひで  
英

ひろ  
博

学位の種類      博士(文学)  
学位記番号      文第220号  
学位授与年月日      平成17年11月10日  
学位授与の要件      学位規則第4条第2項該当

学位論文題目      グローバル経済と東北の工業社会

論文審査委員      (主査)

教授 吉原直樹      教授 高城和義  
教授 海野道郎

## 論文内容の要旨

### 序章 東北の工業振興と「場所」

#### (1) この論文が扱う対象とそれに対する現状認識

この論文の対象は、地方圏の中小の工業都市における戦後地域開発の内実とその結果、そして、グローバル経済下における地域工業の高度化への取組みの現状、である。

この論文では、地方中小都市の現状について次のように認識する。そこでは、戦後の地域開発にもかかわらず中央の大都市との経済格差は縮まらず、産業や雇用をはじめとして地域全体の活力が低下してきた。また、経済のグローバル化が激化する1990年代以降、大手製造業の加工組立部門の海外移転が増加するにつれて地域工業の空洞化が進み、そのことが地方圏の全体としての疲弊をますます強めている。他方で、近年になって高付加価値型の工業への自立展開の動きがみられるものの、その内実と実現の成否は、各々の都市の事情を反映して一様ではない。そのさい、国内外に及ぶ都市間・地域間競争のもとで、地域経済の自立的発展の要因として、その地が擁している、もしくは作りあげている様々な次元にわたる地域諸要素の個性、言い換えると「場所の個性」の大切さが浮上している。

#### (2) 先行研究

この論文の対象をめぐる先行研究は、これまで、社会学のみならず地域経済学や経済地理学などといった隣接分野でも相当数の刊行物が著わされている。社会学分野でこの対象領域の研究を主導してきたのは地域社会学である。そこでは、「構造分析」的な理論枠にのっとり対象都市の経済構造そして社会構造が分析され、さらに、それらの構造に規定されまた規定し返していく対象都市住民の生活構造や意識構造が分析されてきた。この研究のなかで、生活の論理よりも資本の論理が優先されてきたがゆえの地域諸矛盾のほか、地域経済の活性化にとってもつ外来型発展の限界などが実証的に解明されてきた。

しかしここ10数年、現実社会の変化をふまえて、こうした「構造分析」的な理論枠がもつ不備が幾つか指摘されてきた。本論文では、それに加えて、この「構造分析」は地方都市の分析を介して日本資本主義の全体構造を普遍的に解明しようとする精緻化を重ねてきたのであって、そのぶんだけ、対象都市をその個性とのかかわりで捉えたり、その個性の形成過程を捉えたりする視点が弱いことも指摘できると考える。

### (3) この論文の目的

この論文の主な目的は、これからの地域開発や工業振興のあり方を見据えつつ、地方中小都市の個性に着目する観点から地方圏における戦後50年余りの「開発」を理解することにある。この目的を、第一に、戦後の工業振興の推移と地域工業の自立展開に向けた今日の営みを、地方中小都市の各々の個性とのかかわりから実証的に明らかにすることを通して、第二に、こうした各々の個性を横断して見られるところの、「開発」を受容してきた、もしくは受容せざるをえなかった地方都市の側における共通の内因を探る観点から明らかにすることをおして追求する。

この論文は、先行研究の成果をふまえながら(4)に記す視点から実施した事例研究である。対象地は福島県のいわき市と会津若松市、山形県の米沢市、岩手県の北上市と花巻市、そして青森県の八戸市の6都市である。いずれも東北を代表する地方工業都市であるとともにそれぞれの開発を経験してきており、この論文の格好の事例対象地である。

### (4) この論文の視点

この論文では、上の目的を近年の社会科学において注目を集めている「場所」概念に着目するとともに、この「場所」概念をより精緻化することによって追求する。それは、「場所」概念の精緻化そのものもこの論文の目的の重要な一部となることをも意味する。具体的には、「場所」概念に「場所の個性」と「場所への意図」と「場所の思想」という3つの分析的な含意を持たせ、これらの下位概念をキーワードにしつつ上の目的を追求する。以下に、この「場所」概念とその精緻化の要点について述べる。

ここでは、「場所の個性」を、自然的、社会的、歴史的もしくは文化的諸規定のなかで積極的もしくは消極的に取捨選択されてきた地域諸要素の編成体として、つまりは、主体的に形成されてある実体として捉える。そして、こうしたもろもろの地域要素はなにがしかの「場所への意図」によって編成されるのであり、「場所」の範囲は、この「場所への意図」や行為が及ぶ範囲とみることができる。そしてこの「場所への意図」をその深層から規定する主体的な条件のひとつとして、その主体が明示的もしくは暗黙のうちに内包させている「場所」へのイメージや自らの地に対する自己認識いかえると「場所の思想」をあげることができる。

## 1 章 東北工業都市の開発史と今日的課題

1 章では、対象6都市の個別の事例分析に入る前に、多くの統計書や官公庁作成による報告書を使用しながら東北全体の工業振興の歴史と現状を把握したうえで、そこに見られる特徴と課題についておおまかに述べている。

そのなかで、東北の戦後の工業振興がもつ外来型の性格、そして1980年代から電気機械産業が急速に進出してくる背景を具体的に明らかにしたうえで、グローバル経済の進行下にある東北工業の現状とその課題について概観している。さらに、近年の東北の工業は、一方で主に首都圏からの企業誘致に依存する外来型の工業振興策の性格を残しつつも、他方では高付加価値型の地域工業への自立転回の動きが散見されつつあるとともに、その支援体制の拡充に向けた動きが活発化していることを明らかにしている。

## 2 章 炭鉱城下町から首都圏近接の複合的工業都市へ——いわき市の工業——

2 章では、明治中期から昭和30年代前半まで炭鉱城下町として活況を呈し、その後は新産業都市として指定されて化学・電気機械・そして近年では輸送機械という三本柱の工業構造をもっているいわき市の工業を対象とした事例分析を行った。

炭鉱城下町としての工業の前史と新産業都市指定以降のいわき市工業のいずれにも、自立した工業振興を志向する「場所への意図」ではなく、中央の政策や資本に工業振興の牽引力を求める外来志向の「場所への意図」が共通してみえてくる。そしてその深層には、広大な平坦部と温暖な気候とあいまって首都圏に近接しているいわき地域の地理的な比較優位性という「場所の個性」に対する信頼と経営上の成功体験が、自らの地に対する自己認識いかえれば「場所の思想」として横たわり続けている。今日のいわき市工業にあつては経済のグローバル化に対応する工業の高度化の担い手が不透明であるが、こうした現状にも、上の地理的な優位性への自己認識もしくは「場所の思想」が大きく与かっている。しかも古くからの地域中小企業のばあい、業種間の敷居に加えて合併前の旧地区を単位とする地元意識も強いことなどもあり、その自立的な工業振興という「場所への意図」の全市レベルでの醸成を一層むつかしくしている。

## 3 章 地場産業の町から富士通城下町へ——会津若松市の工業——

3 章では、江戸期から会津塗りと会津酒の地場産業の町として名が知られるとともに、1960年代末からは富士通グループの半導体の世界的製造拠点となって「富士通城下町」とも称されるようになった会津若松市の工業を対象とした事例分析を行った。

会津若松市では、漆器や酒造といった産業上の個性が1960年代までその重みを保ち、それが広汎にわたる会津の「場所の個性」を形成していた。1970年代以降になると、富士通グループの企業城下町という新たな「場所の個性」がそれに取って代わるようになる。その後の経過は、外来型の工業振興をとげた東北の他の中小都市と同じように、会津の旧来の「場所の個性」を色褪せ、抽象化・均質化させる道のりであったといつてよい。さらにまた、富士通城下町という「場所の個性」のなかには、会津の工業振興の担い手を中央資本という外来の主体に依拠しようとする「場所への意図」が織りこまれている。そしてその「意図」は今日でも色濃く機能し続けており、会津の自立的な工業振興とその担い手が登場するのを妨げる一因になっている。さらにそうした「場所への意図」の深層には、明示的と暗黙のうちに問わず、会津の「後進性」や内陸盆地であることの「閉鎖性」に対する自己認識いかえると「場所の思想」が横たわっている。

1960年代以降の会津の工業振興は、会津への「後進性」や「閉鎖性」といった自己認識を相対的に浮上させながら、外来の力によって中央との経済格差を埋める対象として自らの地を自己認識する経済一元的な「場所の思想」が広く染みわたり、しかもそれが地域中小企業を含めた会津の住民一般にも広く受容されてきた過程と見ることができよう。

## 4 章 スピンオフの土壌と企業化支援——花巻市の工業——

4 章では、主に外来型の工業振興をたどった東北の工業都市のなかにあつて内発型の工業振興の歴史をもち、近年では、全国的にみても先駆的な起業化支援策を展開している花巻市の工業を対象とした事例分析を行った。

花巻市の工業のなかには自立的な地域企業家風土という「場所の個性」が醸成されてきたが、そこには地元出身の谷村株式会社新興製作所の戦時疎開と、この谷村新興から多数の企業がスピンオフしてき

た戦後の歴史が大きく関与している。花巻市は、この自立的な地域企業家風土という「場所の個性」を醸成させながら、東北の内陸の小都市にあってほとんど他に類をみないような内発型の地域工業を展開させてきたといえる。しかし首都圏からの企業誘致が進んだ1970年代半ば以降、とくに経済のグローバル化が進む近年、全体として高度な技術を保有して高付加価値型の経営を実現している地域企業はなかなか排出されていない。つまり、上の花巻市の「場所の個性」が確固として継承されてきたとは言い切れない。

こうした状況にあって、花巻市行政は、その自立的な工業振興という「場所への意図」をこめて、1990年代に入ってから多彩な起業化支援策を積極的に推し進めている。その顕著な成功事例はまだ現れていないとはいえ、東北の内陸の小都市でありながら、外来型の工業振興のみならず、他都市にはみられないようなスピノフや起業化の相応の歴史を早くから経験してきた自立的な地域企業家風土という花巻市の「場所の個性」をかんがみると、地域企業の高度な自立展開を図ろうとするこうした工業支援策がもつ地域に根ざした意義には大きなものがある。

## 5章 基盤技術の一大加工センター——北上市の工業——

5章では、臨海部と違って北東北の内陸にありながら、1950年代半ば、とくに1960年代に入ってから急速な工業化を遂げて、金型製造や機械加工(切削・プレス等)やメッキ、塗装といった「基盤技術の一大加工センター」とまで称されるようになった北上市の工業を対象にした事例分析を行った。

「基盤技術の一大加工センター」という北上市工業の特徴のなかには、中央から遠く離れて交通も不便な北東北の寒冷な内陸という北上市の「場所の個性」が大きく与かっている。基盤型工業はもともと騒音や臭気など公害発生型の業種であるが、1960年代にあって地理的・気候的に不利な条件下にありながら工業化を目指した北上市は、立地や移転先に苦勞していた首都圏のこうした中小企業を積極的に誘致せざるをえなかったからである。

また北上市の工業振興にとっては、高速交通網が整備され始める1980年あたりはおろか1970年代に入ってから政府が内陸型企業の立地促進策を打ちだすよりもかなり前、農村としての性格がまだまだ色濃かった1950年代半ばというかなり早い時期にあって、首長をはじめとする北上市行政が外来の誘致企業の招致による工業振興という「場所への意図」を選択したことが大きく作用したといえる。そしてこの「意図」の深層には、北東北の内陸にあっての「後進地帯あるいは低開発地帯」や「近代産業の立ち遅れ」などといった自らの地に対する「場所の思想」とでもいえそうな後進性の自己認識を指摘できる。

近年になり、早期から誘致されてきて高付加価値型の経営を実現している外来の企業が北上市に土着化する動きが大きくなっている。こうした企業にあっては、上に見たような自らの地の後進性を自己認識する「場所の思想」はすでに影をひそめ、それにかわって、自らの地の工業振興を自立的に具現しようとする「場所への意図」、そして、自らの地をその意図の実現が可能な地として自己認識する自立的な息遣いをもった「場所の思想」が根をおろしつつある。

## 6章 弱電の町と企業間ネットワーク——米沢市の工業——

6章では、北上市と同じく1960年代という早い時期から企業誘致による外来型の発展を遂げ、今では「弱電の町」と称されように電気をはじめとする高付加価値型の機械器具分野の企業を集積させている米沢市の工業を対象にした事例分析を行った。

米沢市工業は、1980年前後から「弱電の町」としてその名を全国に馳せている。そこには、東北地方の雪深い内陸の地における一次産業と米沢織の優勢のなかにあつて、早い時期から外来の誘致企業を招

致することによって自らの地域の振興を図ろうとする明示的な「場所への意図」があったことの意義は大きい。しかもここでは、誘致企業（大手6社）ぐるみで企業間の「競争・協調ネットワーク」を作りあげるにより、地域企業自らが地域工業の高度化に向けた「場所への意図」を具現させるための組織的支援のあり方を作りあげている。そこには、大手6社の多くが、中央だけを向いている外来度の強い誘致企業というよりは、その出自からして地元企業に近い性格を備えた、もしくは土着化の度合いが強い企業であったという性格がかなり与かっている。

さらに、ITを活用した高度なコミュニティビジネスを模索している米沢ビジネスネットワークオフィス（BNO）のごく最近の動きのなかには、地域固有の新しい市場を地域IT化の推進とからめながら開拓しようとする、いわば固有の「場所の個性」を抱えた地域の内側に足場をおろした内発型の地域振興という「場所への意図」が織りこまれている。

## 7章 漁業水産基地と基礎素材型工業の町——八戸市の工業——

7章では、古くからの漁業・水産基地であるとともに、八戸地区新産業都市に指定されるなど戦後一貫して外来型の「開発」を歩んできた北東北の中核都市としての八戸市の工業を対象とした事例分析を行った。

八戸市における戦前からの漁港の整備や水産加工業の集積は、漁業・水産基地としての「場所の個性」を形成してくる過程であった。しかし、新産業都市指定以降に八戸市の外来型の工業振興という「場所への意図」が臨海型の基礎素材型工業を突出させてくるのに伴って、従来からの水産加工業のほか砂鉄や石灰石などの土着資源に依拠した地場資源型工業が衰退してくる。それにあわせて、従来からの地場資源型工業という産業上の個性に係留されてきた八戸市の「場所の個性」が抽象化されてくる。

こうした戦後八戸市における外来型の工業振興史の深奥には、「3年に1度の凶作のくりかえし」、「引きも切らずに流れ出る出稼ぎ者」、「離散—流浪—餓死—身売りの歴史」、「藩政時代からの飢饉」、「敗北・従属の歴史」、「本州最北の青森県」などといった自らの地に対する「後進性」認識もしくは「場所の思想」が大きく作用していたと考えられる。そしてそれが、「開発」こそがそれを断ち切る有効な回路を形成するという認識・思想を導くことになる。あわせて、港湾都市であるがゆえの外に開かれている「開放性」という自己認識もまた、港湾整備に端を発する外来型の企業誘致策を積極的に受容してきたもうひとつの場所的な思想規定だったとみなすことができる。「後進性」に加えてこの「開放性」認識もまた、八戸の漁業基地・港湾都市としての従来の「場所の個性」ともあいまって、人々のいわば無形の日常思想のレベルに折りたたまれてきた「場所の思想」だといえよう。

## 終章 「場所の思想」の相対化に向けて

東北における6つの地方工業都市の事例分析をふまえると、戦後50年にわたる「開発」の歴史は、それぞれの地方都市の「場所」を編成してきた従来からの地域諸要素が、経済一元的な「場所への意図」を動力として、その生産（工業生産）の装置を優先させるかたちで再編されてきた過程だったといえる。そしてこの「場所への意図」の主体は、東北の外来型の戦後開発史を振りかえれば、中央の政府と資本であったのはいうまでもない。そしてこの経済一元的な「場所への意図」の奥底には、東北もしくは地方圏に広がる中小都市が、中央資本にとっては経済利益をつかみだすことができる、あるいはつかみだしやすい対象として優先的に認識されてきた、いわば「場所」に対するイメージ、いいかえると「場所の思想」が横たわっていた。そして、中央資本によるそうした「場所の思想」とそれにもとづく上の「場所への意図」を地方都市の内側から受容してきたのが、「後進性」や「閉鎖性」、もしくは「開放性」

や「首都圏近接の優位」といった自らの地に対する自己認識もしくは「場所の思想」であったとみることができる。そしてこうした「場所の思想」は、「地域間格差」がことさらに語られる高度経済成長期の入り口という歴史位置を念頭におけば、経済利益を後追うべき地として自らの地を自己認識する、やはり経済一元的な「場所の思想」への親和性を色濃くしていったとみることができる。こうしてみると、地方都市を横断する「場所の個性」の今日的な均質化は、つきつめてみると、場所に対する過剰なまでの経済規定を色濃く受けた戦後日本の「場所の思想」の台頭にその震源をもつといえよう。そしてこの「場所の思想」の全国レベルでの一元化傾向がまた、地方圏における戦後の「開発」ひいては資本の拡大再生産を、どちらかといえばすんなりと受容させてきた大きな内因だったといつてよい。ほぼ半世紀を綴ってきた戦後日本の「開発」史は、地方圏におけるそうした「場所の思想」のひとつの歴史的な表現体とみることができる。

しかし、経済のグローバル化への対応圧力がもたらした地域工業の高度化のなかで、自立的な工業振興という「場所への意図」が息吹きつつある。そして、技術や経営の高度化を達成しつつある地域企業を排出している地方都市にあつては、企業経営者や行政担当者のなかにくすぶっていたかつての「後進性」や「閉鎖性」といった自らの地に対する自己認識もしくは「場所の思想」は、もはやほとんど影をひそめている。こうして、地方工業都市の内側に立ち入ってみれば、中央の勢力を頼ることで自らの工業振興を実現しようとした「場所への意図」は明らかに後退しつつある。そのことは、地方都市がその外来型の工業振興を選びとるなかで歩んできた「場所の個性」の均質化の道筋を相対化しつつ、その地に根ざした地域諸要素の活用とその編成のあり方を新しい「場所の個性」の形成へとつなげていく主体的な条件を広げているといつてよい。経済のグローバル化がもたらした高付加価値型の企業経営への圧力は、それへの対応のなかから、戦後の「開発」のなかで広がり尽くしてきた「場所の個性」の均質化へのベクトルを相対化させながら方向修正していく条件をもなにがしか胚胎させつつある。

#### 4 論文の意義と今後の課題

この論文の意義として、第一に、「外来型」という性格のもとに一括されがちだった地方圏の戦後開発史、そしてグローバル経済下における地域工業の高度化への動きを、各工業都市の「場所の個性」とのかかわりから実証的に把握しえた点をあげることができる。第二に、戦後の開発の要因は、よく言われてきたような中央と地方との間の地域間格差とその是正というのみならず、そこには、開発を受容する地方圏の内側にある「場所への意図」やその基底に横たわる「場所の思想」が大きく作用していた点を実証的に明らかにしえた点をあげることができる。総じて、「場所」概念に着目し、しかもそれに「場所の個性」「場所への意図」「場所の思想」という3つの分析的含意を持たせたこの論文の視点の実証的な有効性が少しは明らかになったかと思われる。その意味で、地方中小都市やそこでの「開発」を扱ってきた従来の研究に新しい分析視点を付け足しえたとともに、近年の社会科学における「場所」論にも、その理論研究上・実証研究上のなにがしかの貢献をなしたのではなかろうか。

他方で今後の研究課題として、第一に、「場所」概念をめぐる内外の諸学説に一層広く目を向けながら、それらの学説状況のなかにこの論文で得た分析視点を理論的に位置付ける作業を精緻化させる必要があること、第二に、この論文では実証上の曖昧な点も残された点を省みつつ、「場所の個性」「場所への意図」「場所の思想」という分析視点の有効性をより確かなものにできるように、具体的な実証研究の精度を上げていく必要があること、などを考えている。

# 論文審査結果の要旨

本論文は、場所概念のもつ包括性に着目して、戦後日本の東北の「開発」もしくは工業振興のあり様について「場所の社会学」として定式化を試みようとしたものである。具体的には、自然的、社会的、歴史的、もしくは文化的に規定された地域諸要素の編成体として〈場所の個性〉を捉えたうえで、そこでの地域諸要素を導き出し、付加・創造し、移転し、真似、整除し、あるいは無視し捨象したりする、「場所」にたいする働きかけを〈場所への意図〉とみなし、さらにそうした〈場所への意図〉を深層から規定する主体的条件の一つとして、その主体が明示的もしくは暗黙のうちに内包させている「場所」へのイメージやみずからの地にたいする自己認識を〈場所の思想〉と捉えるものである。本論文は、「場所」概念の如上の三つの分析的な概念を、東北における6つの都市の「開発」史と工業振興の内実をスライドさせてその有効性をたしかめようとするものであり、全体は、序章、第1章～第7章、終章とから成る。

まず「序章」では、本論文を貫く分析的な概念である〈場所の個性〉、〈場所への意図〉、〈場所の思想〉の社会的含意とそれらの相互のかかわりが述べられるとともに、戦後50年にわたってしるされてきた外来型の開発が、東北の各都市において連綿と蓄積させてきた〈場所の個性〉の歴層のかなりの部分を均質化し抽象化させる一方で、それぞれの都市が歴史的にかたちづくってきた自然や風土や産業、さらにはそこに住む人びとに染みこんできた有形無形の思想に通底するものであった、とする本論文の基調が示される。

「第1章 東北工業都市の開発史と今日的課題」では、上述の「序章」を受けて、まず東北地方の戦後開発史が戦後日本の地域開発政策の展開に即して概観され、それが外来型の開発史として総括される。そして1980年代以降、電気機械産業を主軸にしてみられるようになった高付加価値型の地域工業への転回が依然として外来型の開発の色調をとどめながらも、他方で内発型の工業振興と地域工業の自立というねらいを内包するものであることが指摘される。

さて上述の第1章を総論として、第2章から第7章にわたって各論的な展開がなされている。「第2章 炭鉱城下町から首都圏近接の複合的工業都市へ」では、いわき市の工業を事例として、文字通り炭鉱城下町を経て化学と電機と輸送を三本柱としつつ大小さまざまな業種と企業をかかえる首都圏近接の複合的工業都市へと変貌を遂げた工業展開の内実が「場所」にひきつけながら論じられる。そして首都圏に近接しているいわき地域の地理的な比較優位性という〈場所の個性〉には、自立した地域振興を志向する〈場所への意図〉ではなく、中央の政府や資本に地域振興の牽引力をもとめるという外来志向の〈意図〉が織りこまれていること、そしてそれじたい、工業振興上の成功体験をみずからの地域にたいする自己認識、すなわち〈場所の思想〉として底在させている、と指摘する。

「第3章 地場産業の町から富士通城下町へ」では、漆器と酒造の地場産業の町から半導体の富士通城下町をかたちづくるようになった会津若松市の戦後の工業の展開が検討に付される。そこでは地場の漆器や酒造という産業上の〈個性〉の連続線上において富士通城下町という新たな産業上の〈個性〉が形成されたこと、そしてその過程において会津の地域振興の担い手を中央資本という外来の主体に依拠しようとする〈意図〉が織りこまれていること、さらにそうした〈意図〉が「会津とともに生きる（ほかない）」という従来からの〈場所の思想〉の裏面にひそんでいた会津の「後進性」や内陸盆地であることの「閉鎖性」にたいする自己認識、すなわち〈場所の思想〉に根ざしていることが観取される。

「第4章 スピンオフの土壌と起業化支援」では、スピンオフを早くから導入するなど、自立的な地域

起業家風土という東北において稀な〈場所の個性〉を醸成させながら、内発型の地域工業を展開させてきた花巻市の工業の事例が座に据えられている。そこでは事例のもつ先駆性と無比性に高い評価があたえられながらも、如上の〈場所の個性〉そしてそこを通底する内発的な地域振興への〈意図〉が、グローバル化がせまる高度な技術を保有する高付加価値型の経営の展開のための礎となっていないこと、そして何よりもそうした展開をこころみる自立企業の台頭がさほどみられないことが指摘される。

「第5章 基盤技術の一大加工センター」では、内陸の農業の地にあつてはやくから工業化の道を選び取り、今や基盤技術を主とする東北の一大加工センターとまで称されるようになった北上市の工業を事例として、その促迫の要因が「場所」に引きよせて検討されている。そして、北東北の内陸にあつての「後進地帯あるいは低開発地帯」や「近代産業の立ち遅れ」などといったみずからの地にたいする後進性の自己認識から脱して、みずからの地の地域振興を自立的に具現しようとする〈場所への意図〉とその担い手、さらにみずからの地をそれが可能な地として自己認識する内発的な息づかいをもった〈場所の思想〉が獲得されていく過程に熱いまなざしが注がれる。

「第6章 弱電の町と企業間ネットワーク」では、米沢織の町から高付加価値型の弱電の町へと変貌をとげた米沢市の工業が事例となっている。ここでは特に半ばNPO的な発想と性格をもった企業間ネットワークの活動にささえられて立ちあらわれている地域工業の高度化の動きに主眼が置かれ、そこに底在するみずからの力によって地域工業と産業の高度化を模索しようとする視点、つまり内発的な自立精神の息づかい＝〈場所の思想〉が読み解かれる。そしてそうであればこそ、本事例は第5章の事例とともに、自立的な工業振興と新しい産業とをめぐりようとする〈場所への意図〉を具体的にはらむものとして位置づけられるのである。

各論の最後尾に位置する「第7章 漁業水産基地と基礎素材型工業の町」では、港湾をその土台にもちつつ戦前から一貫して水産加工と基礎素材を基幹的部門としてきた八戸市の工業に座が据えられている。そこでは八戸市の工業政策と都市政策がもつ一定の先見性と主体性が浮き彫りにされるとともに、国家的な開発プロジェクトへの長期にわたる依存／便乗という、いうなれば「外から」もしくは「上から」強いられた受動的なスタンスが透視される。そして筆者は、後者の受動的なスタンスの基底に八戸市という場所への後進性、さらに津軽との対抗意識に縁由された〈場所の思想〉を見いだすとともに、それらが「開発」の現実場において再生産され、結果的に八戸市という地域経済の外部依存の固定化をうながしているとみるのである。いうまでもなく、ここでは港湾都市の歴史にねざす「開放性」認識という〈場所の思想〉が少なからず影をおとしている。

以上、各論の展開を踏まえながら、そして「序章」の問題意識に立ちかえって、「終章」では、東北における戦後の「開発」史と工業振興の内実が再審され総括に付されている。筆者によれば、六つの事例分析を通して共通に指摘できることは、50年の開発がそれぞれの地が固着させてきた旧来の〈場所の個性〉を色あせ均質化させてきたこと、そしてそこに色濃く投影しているのが経済一元的な〈場所への意図〉であったということである。さらにこうした〈場所への意図〉の奥底には、中央資本の「意思」と親和性を有し、かつ「後進性」や「閉鎖性」、あるいは「開放性」とか「首都圏近接の優位」といった言葉に底礎する〈場所の思想〉がよこたわっているのである。同時に、筆者は、経済のグローバル化の進展とともにすすんでいる地域工業の高度化の動きのうちに、地方都市がこれまで外来型の工業振興を選びとるなかであゆんできた〈場所の個性〉の均質化の道筋を相対化しつつ、その地に根ざした地域要素の活用とその編成のあり様を積極的に選びとっていけるような主体的な条件をひろげている磁場空間をみている。

以上、本論文は、戦後日本の「開発」史と工業振興の内実を、〈場所の個性〉、〈場所への意図〉、〈場所



の思想〉という分析的概念を用いて、具体的経験的な場で社会的に定式化することに果敢に挑戦している。こうした試みによって得られた知見は、従来経済地理学もしくは地域経済学によって得られた知見の一面性に修正をせまるとともに、いわゆる「場所の社会学」形成に向けての貴重な一里塚を成すものであると考えられる。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。